

第十一回全国ボランティアフェスティバルやまなし・芦安村部会を終えて

わずか560人足らずの我が村で、全国ボランティアフェスティバルを実施するということは既に「小さな村の大きな挑戦」ではないかと思えます。この大きな挑戦のボランティア大会の部会を昨年に立ち上げてからいる調整がされてきました。村を花できれいに飾ろうと、観光協会・老人クラブ・ボランティア等の人たちにより、村の玄関であるアーチのところの花畑・新倉の花畑また会場の周り等村内の花植え、職員による「よこそ芦安村へ」の看板作り、交流パーティーへの手作り料理の研究、夜叉神峠までの樹木の調査・リハーサル登山、樹木に設置する樹木名版50枚の手作り作業交流ひろばでの販売品のわらぞうり、そばづくり、きびご飯など様々な準備が多くの住民によりなされてきました。

当日は、県内はもろろん北は、青森県、南は京都・愛知県など総数180人あまりの参加がありました。

交流パーティーでの中学生による夜叉神太鼓は、力強く素晴らしい演奏でした。立食パーティーにおいては郷土芦安ならではの手作り料理に舌鼓をうっていました。苦労したかと思えます。

参加者と住民とのなごやかな交流のなか、次回開催である石川県の皆さんが、来年度開催のPRをしました。

2日目は、夜叉神峠ハイキングと白鳳溪谷自然観察があり、朝5時30分に出発した夜叉神峠ハイキング班は、3班に分かれそれぞれ樹木にプレートをかけて登り、一人一人プレートを掛けた写真を撮り記念に持ち帰りました。

白旗史朗先生による「すばらしきかな南アルプス」と題し、南アルプスの王者北岳に魅了され50年もの歳月を芦安村とはきつても切れない関係があるとの基調講演、そのあとパネルディスカッションがあり、南アルプスの魅力を生かしながらの村おこしを住民・NPO・行政でのかかわり、ファンクラブと村の活性化の協働での村おこしの理想論、保健師長谷部さんの過疎の実情、高齢者のくらし、住民とのかかわりなど、意見交換がありました。

会場からもコメントを頂きながら盛大にパネルディスカッションは終わりとなり、最後に芦安からのメッセージとして芦安中学校生徒会長より「芦安村は来年128年の歴史を閉じ「南アルプス市」に変わってしまえますが自分たちの手で南アルプスの玄関の芦安を守っていく」と心からの誓いを力強く読み上げました。会場の中には、強く胸を打たれ涙を流す人もありました。

午後からは交流ひろばが開かれ、手打ちそば、きびご飯など参加者によるごばれ



全住民、芦安ファンクラブ、ボランティア会、老人クラブ、調理師会、観光協会多くの人の力に支えられながら素晴らしい全国ボランティアフェスティバルを終えることができより感謝申し上げます。このボランティアフェスティバルにかかわることにあたり、多くの人と交流することができ私自身ほんとうに勉強させてもらい、いい機会をあたえてもらえたと思えます。これからの課題として住民・行政・NPOとのかかわりを多く持ち芦安地域の活性化への取り組みをしていきたいと思えます。

芦安村住民環境課長 森本栄子



県民の日、青空の中

「甲斐ヶ根庵」そばの会大活躍

十一月十六、十七日甲府市小瀬会場では恒例の県民祭が行われた。各町村別のブースでの出店にそばの会「甲斐ヶ根庵」が村から依頼され、二日間、芦安の手打ちそばを実演販売し、会場に集まった多くの人々から好評をいただいた。

晴天に恵まれた今年の県民の日祭は二日間多くの人々で賑わいを見せ、特に各町村のテナントが並ぶふれあい広場にはそれぞれの地域ご自慢の品々が人々の目を引いた。時期的に野菜、果物等が多く買い物袋一杯の荷物を手に下げている光景が見られた。地場産業の竹細工や工芸品売り場も盛況のようだった。食べ物類も多く、そば、うどん、ほうとう、トン汁などが会場にいい匂いを漂わせていた。芦安村のテントにはそばの会「甲斐ヶ根庵」が自慢のそばを披露していた。難しい屋外での手打ち作業も晴天無風の好条件に恵まれて、腰のある、のど越しのいい、しかも二：八の長いそばがゆであげられていた。多くの人が「何処に行けばこのそばが食えるのか」「店は何処にあるのか」などと聞いていた。

一日目には天野知事夫妻も会場を訪れてそれぞれの店をまわりながらねぎらいの言葉をかけていた。「甲斐ヶ根そば」をも味見していただき「昨年広河原で開山祭の時にいただいたが、今日のそばはまた格別美味い」とのお墨付きをいただいたとのこと。二日間の販売予定数を早々に売り上げて、まだ食べたそうな来客にすまなそうな顔をしているそば職人達は、「早くこのそばを多くの人達に披露できる場所が欲しいね」と、口々につぶやきながら片付け作業に追われていた。芦安の特産物に定着しつつある「甲斐ヶ

根庵そば」を常食出来る施設が、早く誕生するといいですね。
(清水記)



手造りの紅葉祭が金山沢に展開

十一月十日恒例の紅葉祭が芦安村金山沢こだま公園で行われた。昨年からは村民が関わる「手造りの祭」に内容変更され好評を得ているが、今年も多くの出店が祭を盛り上げてくれた。祭には峡中地域振興局 勝局長始め合併後南アルプス市になる近隣町村の議会議員の出席をいただき、この祭が新市になって地域活性化のために必要であり、益々充実していつて欲しい」等の激励をいただいた。

イベントは金山沢にある温泉広場を中心に、紅葉の山すそにあるクライミングボードでは県山岳連盟の協力によるクライミング体験が行われ、村を一望できる桃ノ木・鳩打林道では紅葉狩りツアーバスが運行された。一番先に祭りの参加者を感動させたのは芦安中学生全員による夜叉神太鼓の演奏だった。指導している宗先生の指揮のもと、メリハリの利いた太鼓の音色に観客は惜しみない拍手を送っていた。

去年人気があったチロル学園の紙芝居コーナーでは飽をなめながら聞き入る子供たちが集まっていた。村内の元気な御婦人方による、フォクダンスの披露も場内を元氣付けていた。芦安ファンクラブでも去年から手がけている「みそまんじゅう」を販売し、完売状況からそれなりの手応えを感じている。

村外から協賛してくれた調理師会の寿司販売や夢工房によるやきとり販売は手造りの祭の広がりを見せている。

周辺が陽だまりになり暖かくなってきた頃、デキシーランドジャズの音色からよく聴くポップスへと移り、やがて季節感を現す童謡のメロデーが会場を心地よいリズム感と哀愁で包んでくれた。ボランティアで参加してくれた「

」の皆さんの演奏が終わる頃西日も陰りを見せて肌寒くなり、短くも楽しくった一日も終わりを告げた。(清水記)

南アルプスの山々に

こだまする芦安中太鼓

先日、何気なくテレビのスイッチを入
れると、和太鼓に打込んでいる耳の聞こ
えない青年が出演していた。その青年は
自ら演奏をするともに地元の小学生に
和太鼓を教える先生でもある。

アナウンサーの「太鼓の音は聞こえない
のでは・・・」という質問に対し、「身体
に太鼓の振動を感じるのです」と言った
青年の顔はとてもいきいきとして、和太
鼓を心から愛してやまないというふうだ
った。

私が芦安に赴任して初めて聴いた夜叉
神太鼓の音は、やはり身体の隅々まで響
き渡り、大げさに言くと私の日本人の心
を呼び覚ませるものだった。

音楽教育の現場でも、「日本人でありなが
ら日本音楽の魅力がいまひとつわからな
い」という現実があるなか、子どもたち
が和太鼓と向き合えることは、大切な財
産であると思う。

二年前から子どもたちを指導してくだ
さっている宋寿成先生は、「太鼓には、
郷土芸能の伝承というだけでない神秘的
なパワーがあります。子どもたちの心の
中にひそんでいる愛・希望・感謝の心、
そして勇気などを、太鼓の稽古を通して
引き出したいと思っています」と語って
いる。先生自身が芦安の子どもたちのた
めに人生の序曲として作曲してくれた
「風に乗って」には「将来を担うこの子
供たちひとりひとりが、世の中に必要と
されながら、生きる喜びや共存すること
の大切さなどを学び、豊かな心を持った
人として育っていくことを願います」と
寄せている。

芦安中太鼓部は、芦安夜叉神太鼓保存

会が創られた昭和六十年に創立され、会
の人達に教えていただきながら、先輩か
ら後輩へと受け継がれ、村の祭や地域の
イベントに出演してきた歴史がある。地
元の指導者に見守られ、支えられながら
子どもたちはすばらしい力を発揮してい
る。芦安中の子どもたちは朝の新聞配達
から始まり、全校生徒二十人、一人何役
もこなしながら日々学習している。素直
で純真な子どもたちが奏でる演奏は、聴
く人々の心を打ち、感動を呼んでいる。
大変な練習に前向きに取り組んでいる子
どもたちの努力を讃えたい。すばらしい
子どもたちである。

芦安中学校教諭 丹沢ゆみ子



宋先生指揮のもとすばらしい太鼓を披露する芦安中生徒